

# 赤穂事件の考察

上杉虎雄

昨年は「討ち入り」三百年ということと、「忠臣蔵」ブームが起きた。もとより「忠臣蔵」といえば、四十七士による主君の仇討ちとされてきた。討たれた吉良上野介と米沢の因縁は、実は深い。上野介は上杉家から嫁を貰い、又、その実子が綱憲公として上杉家に養子に入っているのである。米沢としては、上野介が善玉・悪玉のどっちだったかは、大變に重要な問題なのである。果たして、真相は如何に――。

文献と史料による

## 赤穂事件の考察

上杉虎雄

忠臣蔵というお芝居は、吉良上野介を世にも憎々しい人物に仕上げて、大石内蔵助等四十七人を理想的な武士として際立たせている。二百五十年もの間、毎年毎年十二月になると、これでもかこれでもかと上演されれば、日本国中の人は皆歴史的事実として錯覚してしまう。たいへん怖い事である。

上杉家にとっても、米沢市にとっても甚だ不愉快なお芝居が忠臣蔵である。あのお芝居は歴史とは違うのである。歴史的事実はあるのだということを、判って

もらいたい。私も上杉を名乗っている。吉良上野介のまぎれもない子孫である。先祖の汚名を少しでも晴らそうと、「螻蛄の斧」を振り上げた次第である。

### 赤穂事件とは

(1) 浅野刃傷事件

(2) 浅野浪士の吉良邸討ち入り事件  
とからなっている。

### 忠臣蔵とは

赤穂事件をもとにした虚構（フィクション）の名称であり、歴史と混同してはいけない。

赤穂事件は五代將軍綱吉の元禄十四年（一七〇一）三月十四日に起きる。勅使（天皇の）、院使（上皇の）歓迎に追われていたが、特にその日は勅語奉答（勅語に対して將軍が返答をする儀式）の日であった。この日の朝、江戸城内松の廊下で、勅使接待役の浅野内匠頭長矩（播州赤穂五万三千石領主）が、幕府儀典係というべき高家筆頭吉良上野介義央に斬りかかり手傷を負わせる。

「梶川与惣兵衛筆記」は事件のその場に居合わせ、浅野内匠頭を抱き留めた梶川与惣兵衛頼照が書き残した文書。

これは、浅野が斬り掛かった瞬間の情景を記したものである。唯一のものであり、最も信頼のおける第一級の資料である。

「拙者儀今日伝奏衆へ御台様よりの御使を相勤候間、諸事宜しき様頼入由申候、内匠殿心得候とて本座へ被帰候、其後御白書院の方を見候へば、吉良殿御白書院の方より来り申され候故、又坊主呼に遣し、其段吉良殿へ申候へば、承知の由にて此方へ被参候間、拙者大広間の方御休息の間の障子明て有之、夫より大広間の方へ出候て、角柱より六七間も可有之処にて双方より出合ひ、互に立居候て、今日御使の刻限早く相成候儀を一言二言申候処、誰やらん吉良殿の後より、この間の遺恨覚えたるかと声を掛け切付け申候（其太刀音は強く聞え候ども、後に承り候へば、存じの外切れ不申、浅手にて有之候）、我等も驚き見候へば、御馳走人の浅野内匠殿なり、上野介殿是はとて、後の方へ振り向き申され候処を又切付けられ候故、我等方へ向きて逃げんとせられし処を、又二太刀ほど切られ申候、上野介其儘うつ向に倒れ申され候、其時に我等内匠殿へ飛かかり申候（吉良殿倒れ候と大かたとたんにて、間合は二足か三足程のことにて組付候様に覚え申候）、右の節、我等片手は内匠殿小さ刀の鏢に当り候

故、それともに押付け申候」

仮名手本忠臣蔵のように、吉良上野介が浅野内匠頭に悪口雑言を言つて侮辱した、又侮辱するタイムミングはなかつたことが以上の第一級の資料で理解できる。芝居と史実とは大きく違うものである。

### 江戸城内でおきた刃傷事件

江戸時代を通して四件有り、此の赤穂事件は三件目である。

「その一」寛永五年（一六二八）三代將軍家光の時代、

目付豊島明重が老中井上正就を刺殺した事件

「その二」貞享元年（一六八四）五代將軍綱吉の時代、

若年寄稲葉正休が大老堀田正俊を刺殺した事件

「その三」が此の赤穂事件であり元禄十四年（一七〇

一）、將軍は同じ五代將軍綱吉である。

その二の稲葉の事件は、此の赤穂事件の十七年前であり、長矩は十七歳の赤穂藩主であった。当然その二の事件は知っていたはずであり、目的を達するには斬るより刺す方が有効であることは、武士として理解していたと考えてよいであろう。ここで目的を達していれば、第二

の事件は起こらなかつたはずである。更にその二から、刃傷事件を起こせば、その身は切腹、領地は召し上げとなる予想は付いているはずである。但し、浅野内匠頭が精神的に正常であつたとしてである。

「その四」は参考として、天明四年（一七八四）若年寄田沼意知が旗本佐野善左衛門に惨殺された事件がある。

### 將軍綱吉の裁決とその影響

「浅野内匠頭儀、先刻場所柄も弁えず、自分宿意を以て、吉良上野介へ刃傷に及び段、不届きに付き、田村右京大夫へお預け、其の身は切腹仰せ付け被る。

上野介儀、御場所を弁え、手向致さず、神妙の至、御医師吉田意安服薬仰付被れ、外科には栗崎道有に仰付被る。随分大切に保養致す可く候。右に付、高家同役差添、勝手次第に退出致す可し」

喧嘩両成敗の原則を説く者もいるが、これは喧嘩とはいえないのではないか。

(1) 喧嘩とは、双方で相争うことである。

(2) 吉良と梶川が立ち話をしているときに、浅野がいきなり背後からきりかかっている。更に吉良は一切抵抗もせず刀も抜いていない。

(3) 中央公論版『日本の歴史』では

「とにかく事件はおきた。幕閣は処分を決めなければならぬ。老中らは内匠頭や上野介に対する取調べをもとにして評議した上で、柳沢吉保を通じて將軍に言上し、綱吉の裁断で内匠頭は切腹を命ぜられ、上野介は罪がないから、傷の養生をするようにということになった。この処分は格別片手落ちではなく、他の例を見ても当然の結果である。」と論じている。

(4) 俗説あるいは芝居では、吉良が浅野に種々といじめていたといわれるが、はっきりとした証拠は一つもない。あるとすれば浅野が吉良にきりかかるとき、「この間の遺恨覚えてるか」と叫んだだけである。

以上の理由により、喧嘩両成敗の説は成立しない。幕府の見解も喧嘩とは認認していない。したがって綱吉の出した裁決はきわめて真つ当なものといえるのではないか。

吉良が浅野に意地悪をしたと言われる原因について

- ・ 賄賂不足説 大名が自分で金の出し入れをする訳はない。家来の中に夫れ夫れの係がいて記録に取ってある筈であり、家老の許可があって金の出し入れをするのが普通である。大石が「当座遁れ難き儀御座候か」の「か」と原因のわからない書き方をする訳がない。賄賂説は成り立たない。
- ・ 悪口雑言説 梶川与惣兵衛の書き残した「梶川筆記」を見れば悪口雑言など無かったことが判然としている。
- ・ 製塩法秘法不伝授説 当時の製塩法は塩田によるものであり、特別の秘法など無く、塩田の広さと天候だけが問題だったのである。更に塩田作り塩作りについては、赤穂は他地区に公開指導していた記録がある。この説も成り立たない。
- ・ 浅野の奥方に横恋慕した説 最もありえないでたため説で、大名家の奥方が、やたらに他人の目に触れるようなことはありえない。

吉良が浅野にした意地悪の中身について

- ・ 芝居はあくまでも作り事であるのだが、何度も上演されていくうちに、観客は史実と虚構が混同してしまい、虚構がすべて史実だという錯覚に陥ってしまう。畳替

えの話、勅使接待の御料理の話（魚肉料理か精進料理か）など吉良は嘘の指導をしたというのは、芝居の虚構である。もし、勅使に対して失礼の事があれば、それは接待役の浅野の責任だけですむ訳は無い。当然それを指導する役目である吉良上野介が更に重い責任を負わなければならない。であるから、嘘の指導など自分の首を絞めるようなことは無いと考えるのが自然である。

### 「浅野内匠頭長矩」について

寛文七年（一六六七）父は采女正長友、母は志摩国鳥羽の城主三万五千石内藤飛驒守忠政の娘。長男として江戸に生まる。

十八歳にして兵学を山鹿素行に、書を肥後の北島雪山に学ぶ。又絵は狩野派に巧みであり雅号を梅谷と称した。茶は石州流をたしなみ、和歌にも堪能であったという。大名育ちの通弊で、多少我儘で、世間知らずであったこととは否めないが、むしろ自らを持すること清廉で、真面目な良い性質を備えた殿様であったと思われる。

だが、肉体的な欠陥はなかったようであるが、痞（つかえ）という持病があった。現代医学での病名は不明で

あるが、胸などを圧迫されて大変苦しいものらしい。

その痞が、勅使が江戸へお着きになった十一日ごろから段々とひどくなり、毎日薬を飲んで勤めていたようだが、十四日頃にはその苦しさが頂点に達したのかも知れない。

### 痞は精神の病か

『精神科医の見た赤穂事件 浅野内匠頭刃傷の秘密』という本が昭和六十年に出版されている。著者は、北海道に生まれ、北海道で育ち、北海道大学を出て、北海道精神科医をしている中島静雄氏である。赤穂市とも吉良町とも関係なくどちらにも贖罪はしないで書いたと著者はいつている。この本での著者の結論は、浅野は精神の病であると言っていると、わたしは解釈している。浅野の刃傷事件の原因は、浅野内匠頭の病気によっておきたと考えれば、何か納得いくような気がする。

### 浅野家家臣団について

赤穂五万石の藩士は三百八十余名である。新参の家来が非常に多かったという。堀部安兵衛衆知のとおり、家老職にあった大野九郎兵衛も新参であれば、遺言とも思

われる口上を伝えて欲しいと浅野が言ったあいての家来の、片岡源吾右衛門、磯貝十郎左衛門も共に新参の家来であったという。もつとも、片岡と磯貝は内匠頭の男色の相手として召し抱えられたという。新参者が多かったということは、反面内匠頭の勘気に触れて追放された家臣が多かったことを意味していると思う。「閑田次筆」を著した「伴蒿蹊」によれば、大石は昼行灯とよく云われたとあるが、これは、主君内匠頭の中に、異常のあったことをよくしっていて、大きな勘気にふれないための保身の技であったのかもしれない。

討ち入りに参加した四十七人は、主人が病気であったこともしらず、又家来たちの後先も考えずに、殿中ご法度である刃傷におよんだ浅はかな主人のために、死を覚悟の行動に出たことは一応評価するとしても、残りの三百三十数名はどう評価すればよいのか。赤穂の武士、浅野の家来はみな忠義の塊と云った錯覚を持ってしまっているが、此の三百三十数名がいることを考えると、忠臣蔵の持つ響きと大きく違ってしまう。忠臣蔵はそこが芝居であり、作りあげられた虚構であることがはっきりする。

### 吉良上野介義央・履歴

寛永十八年（一六四一） 九月二日江戸鍛冶橋の吉良邸で生まれる。父義冬三十五歳の時である。母は酒井紀伊守忠吉の女。三郎と称す。

承応二年（一六五三） 三月十六日、十二歳にして將軍家綱に御目見え。

明暦三年（一六五七） 十二月二十七日、十六歳で従四位下に叙され、上野介義央と名乗る。

万治元年（一六五八） 十七歳で米沢三十万石上杉家三代定勝の四女三姫十五歳と婚姻。三姫は富子とあらためる。

寛文二年（一六六二） 後西天皇から皇弟識仁親王への御讓位の幹旋という重大な使命が幕府から義冬に下り、義冬は義央を同行してその使命を全うした。

寛文三年（一六六三） 二十二歳。一月二十六日の紫宸殿での、新帝靈元天皇のご踐祚の儀に列して、祝賀を申し上げる朝賀使節として、単身上洛する。この年二月義央は従四位上に昇進する。十月二十八日長男三郎江戸で生まれる。母は富子。後、米沢十五万石上杉家を継いだ綱憲である。

寛文八年（一六六八） 吉良家相続。

貞享三年（一六八六） 綱憲の次男義周誕生。

元禄三年（一六九〇） 義周、義央の養子となる。

元禄十四年（一七〇一） 三月十四日殿中において、いわれなく浅野内匠頭の刃傷にあう。三月二十六日高家役職を辞める。八月十九日幕命により呉服橋より本所松坂町に住居移転。

元禄十五年十二月十四日（一七〇二） 無法集団となつた赤穂浪士により殺害される。六十二歳。

### 忠臣蔵について

忠臣蔵は、赤穂事件を本にしたフィクションであることは前に言った。

「仮名手本忠臣蔵」は寛延元年（一七四八）大阪で初演された人形浄瑠璃がもとで、大阪で大変な評判を取って、江戸に上り歌舞伎芝居となり、これ又大当たりした狂言のことである。

芝居は派手で格好よくなければならない。史実などはどうでもよいのである。だから、この芝居は歴史と違うという文句は決していえないわけのだが、庶民は、芝居そのものが歴史であると錯覚してしまう。そこが恐ろしいところである。

討ち入りは雪の場面であるが、当日江戸では雪が降っていたり、積もっていたりした記録などはないと、気象庁では云っているとか。それに内蔵助打ちならす山鹿流の陣太鼓とあるが、陣太鼓などは持ち合わせてもいなかったし、打ちもしなかったという。裏門を打ち破る大石主税の一隊の「かけや」の音が芝居では陣太鼓に変化させたものようだ。あんな派手な火事装束では、人目について目的地まで到達できなかったのではないか。架空の人物も多々登場し、主要な役目を果たしている。関わりの無い人々にとっては、面白くてたまらない芝居だったに違いない。

### 結語

現在、米沢の人の中にも「赤穂浪士はめでたく本懐を遂げた」と言っている人もいる。仮名手本忠臣蔵にかぶれ、芝居が骨身にまでしみ渡ってしまった方なのだろう。又、上杉家は、吉良家に対し五千石を援助し、吉良邸の火災に際して、又移転にさいしては其の吉良邸再建の費用をすべて上杉家でまかした、ために、上杉家の中には、吉良公の死に対して疫病神を追い払った如く喜んだものがおった、と書いている人もいる。自分の藩主の父

親が非業の死を遂げたのに対し、手をたたいて喜ぶような当時の武家の道徳はさもしいものだったろうか。

現当主邦憲氏も十二月になると毎年気分が悪くなるという。血のつながった直系の子孫である。「憎つくき吉良上野介の白髪首を切り落とす」の台詞を、わが先祖が殺される情景を現しているとすれば、気分が悪くなることが理解されると思う。邦憲氏は毎年十二月十四日と十五日は、役所のお勤めを休まれるという。月日が、いや年月がすべてを水に流してくれるというのは嘘である。吉良町ではこの度、赤穂市の忠臣蔵サミットに初めて参加したという。しかし、上杉家にとって、忠臣蔵サミットなど、とんでもない論外の話である。

(この上杉虎雄氏の論考は、平成十二年十二月五日に発行された『文献と史料による 赤穂事件の考察』を、上杉氏の諒解を得たうえで、会誌編集部が抜粋、要約したものです。ページの都合上、史料的部分などは大きく割愛し、主に要点のみとさせていただきたく存じます)

## 吉良上野介を弁護する

岳 真也



賄賂の強要もインシメもなかった、  
当夜は赤穂浪士らと斬り結んで死んだ——  
ベストセラー小説『吉良の言い分』の著者が  
史料を渉猟して論証する  
「上野介こそ被害者だ！」  
文春新書

赤穂城三百年

期せずして、二〇〇二年秋、ベストセラー小説『吉良の言い分』の著者・岳真也氏による『吉良上野介を弁護する』が発刊された。結論はもちろん、「上野介こそ被害者だ！」